

オーちゃんと遊び

札幌医科大学医師会

うらさわ しょうぞう
浦澤 正三

幼時に“自分”を何と呼んだらよいか分からずに困惑し、姉たちから「オーちゃん」と呼ばれたことを以前本欄に記した（北海道医報、第1224号）。当時の遊びについて少し記してみたい。彼は物心ついて以来対人関係が上手くいかず、近所の子供たちと集団で遊んだ記憶が殆んどない。

いわゆる“引き籠り”状態のオーちゃんは家で一人で居ることが多かった。2階の畳の部屋が主な居場所、父に教わり紙風船や紙飛行機を折り、積み木遊び、玩具の自動車で遊んだりした。また、1階の居間や台所などで家事をする母の後をついて廻り、あれこれ質問したりした。当時のオーちゃんの強い“拘り”については別に書いたことがある（さいはてのふだん記、第87号、2021年）。

外に出ても家の前で一人遊び。地面に釘で○、△などを描いたり消したりしていたが、絵が下手なオーちゃんは絵を描くことはない。繰り返し行動もしばしばで、家の前を端から端まで行ったり来たり、直径2、3メートルの円周上をぐるぐる巡り、目が回ってへたり込んでしまうこともよくあった。

当時は交通運送に未だ馬車が利用されていて、家の向かいが馬の蹄鉄屋だったので、前に馬がよく止まっていた。自らの勇気を示すべく子供達はよく馬の腹の下を左右に潜り抜けて遊んだが、神経質な馬は気付くと嘶き擡げた前足で後方を蹴るので危険な行為だった。臆病で敏捷性に欠けるオーちゃんは勿論試みる気もなかった。

国民学校入学後は、人見知りや“拘り”の強い性格のため集団生活に馴染めず苦勞した。2年生のある時期、一人学校帰りの路上で突然「左にしか曲れない（く）」なったことがある。たまたま運動会の直前で、近所の子らが2手に分かれ真似事の紅白リレーをやっていた。オーちゃんも加わりたかったが、1周200m程の距離で右回りのコースだったので、参加できず悔しい思いをした。

偶にかくれんぼに誘われることもあるが、オーちゃんは鬼の居ない間に本陣にタッチするような冒険はせずいつまでも隠れているので、出て行ってみるといつも終わった後だった。偶に鬼にされると、本陣を空けられないので探しに行かず、一挙に本陣に押し寄せる友達の名前を呼びきれないためいつまでも鬼をやめられず、散会になるといった具合である。

胴馬という遊びがあった。6、7人ずつ二組に分かれ、片方のトップが壁に両手と頭を当て、次はそ

の腰に両手、お尻に頭を付けて、順に繋がり胴の長い馬となる。他方の騎乗組は、トップが胴馬の最後尾から踏み切り壁際の手前まで跳び、順に騎乗者が続き、途中のどこかで胴馬を潰すことで勝ちとなり、再び騎乗の権利を得る。やせっぽちで非力のオーちゃんは恰好な攻撃のターゲットで、いつも潰され味方の敗因となるため、参加しなくなる。

オーちゃんが近所の子等との集団の遊びに出遅れたのは、冒頭に述べた“自分”を表現する言葉を持たなかったという理由に加えて、平衡感覚の異常も関係していたように思う。“加速度”と“眩暈”（眼球振盪といふべきか）である。スキーでの急斜面の滑降、ブランコでの空へ向っての蹴り上げなど加速度が付くと気持が悪くなる。集団の長縄跳びで飛び込む前に回転する縄に目をやった際、汽車の窓近くの席で前方から後方へ猛スピードで飛び去る景色を見てると眩暈がして目を瞑ってしまうのである。大人になっても、片足・長時間立ちが苦手、ポーリングの踏み出して3歩目と4歩目の間で時に脚が纏れたりするのも幼時以来の平衡感覚の未発達のせいだろうと思っている。

こんな訳で、国民学校低学年時代は近所の子供と話はしても集団の遊びに加わることなく見物のみ。得意なのは釘刺し、縄跳び、けん玉、壁に向ってのボール投げなどの一人遊びである。

高学年になると、近隣の子供たちの遊びにも、学校スポーツ類似のドッジボール、三角ベース野球、バレーボールの円陣トス、卓球などの球技が増えてくる。オーちゃんも終戦時の軽川（現在の手稲区）疎開から2条魚町に移り住んだ頃から体力も徐々に向上し、野外での卓球やバレーボールのトスの輪に加わった。特に直ぐ上の兄（次男・敏男）とはあちこちの小学校の運動場に出かけて卓球をしたり、野球のキャッチボールによくつき合わされ、稀には荒井山のゲレンデスキーにも出かけた（急斜面の直滑降は相変わらず苦手だった）。5、6年生になると同じクラスの運動好きの2人と仲良くなり、放課後によく籠球をして遊んだ。

バランス感覚が鈍いことは自覚していたが、足が地面に着くようになった6年生頃にやっと自転車をマスターした。曲がりなりにも何とか泳ぐことを覚えたのは中学1年生時で、北大医学部の長兄（喜一）と友人2人に誘われ、次兄（敏男）、弟（司朗）とともに蘭島海水浴場で3日間キャンプをした折だった。こんな具合に徐々にオーちゃんは精神的な自縛自縛状態から脱していった。

今振り返って不思議に思うのは、当時オーちゃんは、これらの自分に起こる精神的な障害の全てが以前にコンクリート張りの内庭に掘ってあったバナナ熟成用の室に落ちて頭部を打ったことが原因だと固く信じていたことである。本当にそうだろうか、と疑義を懐き始めたのは医学部卒業後かなりの時を経た後のことであった。